

報時了然尔西
錄附藝文



才才
四六
十七
号卷

SUPLEMENTO LITERARIO
"El Argentin Djiyo"

リーさん 七子

(一)

最初に彼女に面識を得たのはパナマのバルボア
で、私は其の当時、智利南極汽船会社所属のイム
ペリアル号と名乗って、バルボアとパナマ間を通る
赤煙突船のサロンのボーイをしてゐたのです。
それは向もコンラド・ド・ハムスを気取つた訳では
なく、神秘的な海洋の魅力が私の放浪癖に投じ
たに過ぎません。……とでも云つて置きます。
いんまりと薄雲をこめた熱帯地の二月、午下り
の空を蒸暑く震駭させて、ボート・ボートと出
帆の汽笛が鳴ると、私は舷に倚つて、新開地気分
の派山ふバルボアの町に——と云ふより、遙かホ
コロンの町のある、マドモアゼールの金髪に袂別
のキスを送つて、波拍三晝夜の歡樂にアディオス
をしてゐました。
すると活俳のロス・コリアンツル然たるデブ事務
長が見慣れぬ一人の日本婦人と連立つてやつて来
ました。
「おい、ナナコー、
船長に贈物して、ウツタマリ甘味汁を吸つ
てゐると称される事務長が、部下を威嚇する時の
例の銅鑼声です。デブ氏の部下に対しての横風
が加減は、殊に婦人の面前では常に百パーセントで

あることを知らねばなりません。

「この御婦人はアントファガスタまで行つてしやる
んだ。好都合にもお前と同じ日本のお方だから、是
からお前をこの御婦人の給仕掛りに命ずるぞ。い
しやう。」
「吾等の閣下、に新入兵の如く最敬礼を捧げた後
私はおづ／＼と婦人に一指しました。
吾が犬和撫子は、稍、扁平な額を、私の方へ四十
五度垂下させて、直と元の位置に返へした。かと思
ふと、デラ／＼と笑ひ出して、去つたのです。
「ゲ・スエラテ、テンゴ、ヨール」と。
私はすつかり度臆を抜かれつちまひました。

食事の時も彼女は半ム長と卓に對合つて、快活に
座談を交へてゐました。妙にゴツ／＼した東洋美
味のアクセントはあるが、彼女の西班牙語は精通の
域に達してゐます。賢淑な装身具と云ひ、服装と
いひ、社交界の名ある婦人とも見られるのです。
アントファガスタとその附近にこれ程の女性を迎へ
る日本人などは、とても想像出来ず、で、私は或
種の好奇心から事務室を訪ひ、デブ氏の助手に
好意の押賣をして、船客名簿拜見と、今思へば
甚だ男らしくない振舞ひをしたものです。
リー・ファン・シエン

二十五才、学生、支那人

セント街、サンフランシスコ

私はバツリと名簿を授けました。
彼女の「お実家、が解つマツラは、私は一種の優
から努めて彼女の忠実なるボーイならんことを

掛けた。ですわ。船がアマキリを過ぎ、カ
イマオに投錨する頃は、私達は他の船客の前で
平然と日本語で軽い無駄口を利き合ふ位まで
になりました。

「ベルウツマ奇麗なとこね。」
通りがかりに望遠鏡を覗いてゐるリーさんに
呼止められる。見れば、ラ・プンタ海水浴場に立並
んだバンガロー式の別荘が悠閑と朝の陽を反射
してゐます。

「文、ですわ。歩くには汚い街ですわ。」
さう。では上陸しようかしら。彼女は暫く考へ
てゐました。でも従兄には逢つて行きたいけれど、
幼い時別れた従兄が里馬にゐるが、通知してさ
いから迎へには来ないかと附加へました。

「何故お知らせになりません。」
「そんなこと北米では流行らないわ。突然に訪ね
て吃驚させてやるから。」

「好い気持のものです。」
結局、私達案内に立つて、ビルングース街角の大き
な雜穀商の前に車を止めました。車から降りる
なり、彼女は店へ向つて喚くのです。

「ドンゴエスタ、ミ・マリモ……アキエスタッ！
フリーマ。」
「いや、あ、呆気に取られた店員共の顔を後ろに
見て、私はさつさとカイマオへ引返へしました。」

リーさんは日本育ちで、しかも横浜香蘭女学校
出身ださうです。二十歳の時、雜穀輸入商人の父
が破産した。桑港支店の挽回の爲に北米行きの旅
に同道して、其終居残つて今に至つたといふ
その得意とするものは、語学で、英、佛、伊、西、それ

に拉典、日支を加へると七ヶ國語。いや、彼女のし
つとも得意とするものは例の女権拡張の論議であ
るのださうです。

女性の言葉の多くを信じない私も、リーさんの場
合は何等のハンディキャップなしに受入れることガ
出来るのでした。尤もそれは彼女が行くアントファ
ガスタの伯母の家で、その町を隨一の富豪と称せら
れる百万長者のリーウオン・チマン商会であること
を私が熟知してゐたからでもあるでせうが……

(つづく)

夕べみなど
ナア寂しうに

若い男ガ

ふくふくを

今宵とまりの

ふむ人は

ひんむんで

さくららう。

道に流る

ド・カレロス

「おい池上、確りしろよ、今年もやっぱり十月から試合が始まるらしいぜ」
今朝から古ぼけた椅子に凭れながら考へて居る所に、いきなり響かぬ親友の口から突然こんな事を聞いた時、池上はハッとした。今までも考へ考へた事でもなかつたが、それより先は考へなければならぬ就職の事で、彼の頭は一杯だったのだ。
「エンスの生田舎に家産奉公が何かしつたら家をつた冬を過ごした池上武二が、鳥の巣立つ様に野球シーズンの近づくと共に田舎から飛出でて日本人の経営してゐる下宿屋に身を投入したのは、一週間はかり前の事だった。
然し毎日物思ひに沈んでゐる池上の姿は何んとも淋しそうだった。彼は過去に赴つた出来事、現在の身の振り方、さては将来への目的等、止めても「いい事を思つては独り敷居を濡らしてゐた」
「で何日頃から練習をやるんだい」
「多分次の日曜日からやるらしい、エーと、二、三、四、五と全部の日曜日を練習しても五回だけしやアやれぬ事になるからねエ、それに都合悪く雨でも降つた日にヤア目も当てられぬエ」
「ウン、本當にそうなんだネ」
「君で君一体どうする気だ、就職の方は……」
「寝て食つたんぢやア金も空しじやないぜ」

「も僕助さうに聞いてゐる池上は一向傾着ぶく、勝手な事を考へて度は帰つて行く。
一週間はかりしつ遊んでゐないのに、最う持ち合せの金が残り少なくなった事も事実だ。
早く就職しなければ直きやアつて来る野球シーズンにも出場出来なうだらうし、それよりもオー食ふ事が出来なくなつてしまふのだ。
何んて此の儘は意気地なしだらう、充分の休養を採つて、それから除るに就職するにんて事は不可解なのかしら、又多慮奉公でもしやうか……」
然し池上は「何の目的で前の家を出て来たのか、それを考へたら……」
池上は椅子に凭れながら深々沈黙に落ちて行つた。
どうしてお前はそんなに沈んでゐるのだ？
何故なんでも考へず就職しないのだ？
この駄々広いエンスの街にお前を容れるだけの余地がないと云ふわけではあるまい。
「だ、彼れがいくら自問自答した如く、差し当つたこの危機を救ふ名案も浮んで来ないらしく、黙然と重れた池上の顔には、濃霧なげな淋しい影が、次々に顔を深くして行つた。
生濡い風がふいと頬を掠めると、パライオに区切られた四角の空は夕焼で真赤に染つてゐた。
ヤブののんびりした春の一日もつぷり暮れて部屋々々に淡い水色のシエドを掛けた電燈がつき初めた頃、何思つたサ池上は服を着換へて外に出掛けた。
赤い灯、青い灯が目まぐるしい程ちらつてゐる。

特別仕立ての大きな頭部を横に振りながら唯だ
漫然と灯の渦巻く街から街へとさまよって行く
池上の黒い姿が、淋しさを長く影をべレーダに
引づけて行く。

酒を飲んだ事のない池上の時微ある大きな頭
が下宿の門をくぐった頃、彼の顔はケブラーチ
のおこり火より赤く燃えてゐた。
時代おくれな柱時計がチン／＼と二時を報じた。
下宿の寝癖まつた部屋々々は静かに寝息を流し
てゐる。
どうも今夜も亦藤小僧を抱いて昔の夢でも結ぶ
としようが、でも世の中つて奴ア全く妻つてゐる。
これ見たいな品行方正な人間でさへ酒を飲めば
悪戯、遠謀が派茶々々にふつちまうんだからな
アルコールの加減で幾分狂的な陽気さを振り廻し
ふがら池上は冷い床にもぐりこんだ。

その翌日だ。
池上が寝不足を目を擦りながら起きた時情炎
に燃えた太陽は最早蒼い中天に笑つてゐた。
「お早やう、池上さん……今日は随分遅くお目
醒めですネ
下宿屋の女主人の云ふ事なんが上の空、未だ幾分
昨夜の酔いでぼけた顔で冷い水を洗つたらフ
クンクンと鼻の煙を輪に吹きながら、池上は丁度
配達されたばかりの邦字新聞を讀み初めた。
今日は新聞の出る日なんだよア、早いもんだで
これは十日の下宿生活をしたわけだ。」

独り言を云ひながら頁を繰つて行く。突然サツ
と顔色を衰へた彼はオミ面の記事にジーンと目を
注いだ。

「亜国野球リーグ戦本年度の各チーム
と大きな見出しの下に色々批評やら日本軍の
奮闘を鼓舞した記事が載つてゐたのだ。
讀み終つた池上の顔には一沫サツと不安な影が走
つた。そして十二時が鳴つたのも知らぬ氣に彼は
例の沈黙思考にふけるのだつた。
やがて晝飯を食ひに下宿へガポツ／＼帰つて末初
めた。

「池上さん御飯ですよ」
女主人の声はいやにかん高い。
春の太陽の下で彼は「エ、……」と氣のない返事をしな
がら食堂に歩みを進んだ。
五人ばかり集まつた下宿人達は、何かが面白相な事
をしきりに話してはドツと破れる様な高笑ひをあ
けつてゐる。
「池上は誰れに話してもなく、又話されるでもなく一
人黙々として箸を運んでゐる。
御飯も済んでお茶を飲んでゐると、側に腰を掛
けてゐた顔の生白く、肉中脊の男が靜かに向を
池上の方へ換へて、さも云憎くうに口をひらいた。
「君は池上だつて言ふんだらうネ、野球の選
手でさ……これでも去年は随分カンチキに足を運
んだもんだよ」

(つづく)

民謡をたづねて

(二)

徳川時代の太平になへかねて、三浦肥後守が唄
ひ出したとがしよ

君と寝やうが
五千石ころが
何の五千石
君と寝よ

と云ふのは、封建政治末期の武人精神頹喪と懷疑
的か武人の思想的傾向を語つてゐる。その後三大都市のやうな大都會では、どんな歌を
も唄はれるが、特有な地方特色のあるのは認めら
れぬ。然しすべての種をあげたに、都会が
ら生れる唄は、品のない、羽二重のやうな肌ざはり
がある。江戸を特有なのは都々逸だ。

主は川上わしや川下で
書いてお流し思ふこと
盛くはなれて逢ひたい時は
月づ鏡になれはよい

江戸っ子らしくシヤレてゐる。鶴羽、伏見の戦いの
後をうけて上野の戦争を最後に剣戟の心づきも

漸くおつまり、維新後に出来た新しいのでは

明日は生帆、日はきまる
見送りませうが波場場まで
ハトバよいこわがれど
別れて傳馬に乗るときは
白い手をしめて一寸まねき
もうし皆さん船長さん
あなのお船のことなれば
未春くるやうなまじやう
わたしや勤の身であれば
未春くるやうなまじやう

同国気分が現れて、いづにも新生の東京らしい所が
ある。

若し高瀬舟にのつて、利根川を下つた事のある人
であつたらう。あの力ある声で川下りの舟頭の唄ふ
潮来節を思ひ出すだらう。そして、この唄をきく
事によつて、香取や生柄の情景をまご／＼と思ひ
浮べることも出来る。

潮来本島の真菰の中に
あやの咲くとはしほらしや
潮来本まから牛蒡までは
雨は降らねと袖しはる
主の寝顔をつく見れば
うらもやはゆるなるものぞ

破節や潮来節は同じ海岸線を通じて秀松地
方の民謡ともなつてゐる。
海の中へつき出した秀松半島には、暖国的な噴が
多い。海辺の人間は青春の目覚めなども早いそう
だから、然しこゝで昔から有名なのはお勝節
だ。

お勝（こ名は高かけれど
親は相模を食する
たどお勝は乞食の子でも
わたしや吉野の花と見る
花と見られて咲かぬもくやし
咲いて見せまじよ咲させまじよ

秀州の方では、他国者を非常に卑しめたところ
であるが、その苦しみられた弱者の声は、こんな
も美しい歌となつて残つたのだ。これは北條あた
りから出たらしい。
北海道の渺茫たる荒野の中で人の心をうるほ
してくれるものは松前島分けである。

忍路高島およびもなないざ
せめて歌集破谷まで
帯も十勝もそのまゝ根室
おつる涙は懐泉

内地人の男に恋をしたアイヌの娘は、かなし
の夢を破られ傷いた胸に、恋の使をした可憐な
蘭の花を空へ抱きしめてさう唄ひながら

山深く入つて行つたといふ哀れにもまた涙ぐま
物語りがある。
(終り)

詩

われ老ひぬ

秋嶺

静かに流る河の水
いく年頬をすりよせま
じやく恋を語り来し
岸辺に走じし恋神

行きて帰へらぬ流れ水
昔の夢を振りすて、
なぐく恋を語り来し
淋しく走じし恋神

一九三二・八・二一



悲人逝きて

秋鐘

青葉を結ぶ樹々も今
花もほろろと春の風
けれど夢に去る人
淋しく花を捨て行きぬ

春風河にたわむれ
花は笑めりと鳥囀
若さを詠ふ君逝きて
せめて思を花に見ん

風は東風あたたかく
小鳥うたうた花は笑む
春は咲けども花淋し
わづ来人の逝きしかは

一九三二

花びら

M.仁科

さざりそぼふる
庭の辺に
つまじやかに寂しくも
名もなき花が咲きました……

ましろき花のひくわらに
母よあまのふるさこの
秋の夜のゆの
ほのしらく……

うすくれふいのひとみらに
妹よあそべたひこり
露のひと夜の
かけさよく……

ほのかな夜の
ひとみらは
遠きにのみす
よき友へ
心の空み書きそへマ
手紙とともに
送らまじし……